

宮沢賢治文学におけるヴァージョンの生成

頼, 怡真

<http://hdl.handle.net/2324/1522371>

出版情報 : Kyushu University, 2015, 博士 (比較社会文化), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)



氏 名 : 頼 怡真

論 文 名 : 宮沢賢治文学におけるヴァージョンの生成

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

本論文の目的は、宮沢賢治（明治二九～昭和八年）の文学を同時代のコンテクストに置いて読むことで、テキストがいかにか改稿され異稿が生み出されてきたかを解明することである。宮沢賢治文学における「ヴァージョン」の問題には、「翻訳」の問題が含まれ、また、「改作、翻案、焼き直し」という問題も含まれている。そして賢治テキストの場合、改作の問題を意識して創作が行われており、賢治自身の言葉でいえば「modify」を行うような書き換えが絶えず賢治テキストでは行われている。

第一章「宮沢賢治「ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記」と「ひのきとひなげし」——「浅草オペラ」と「宝塚少女歌劇団」の追体験」では、テキストを同時代のコンテクストに置くことで、テキストの新しい解釈を行うことを試みた。本章では、「ネネムの伝記」に登場している「奇術大一座」のナンセンスなコントやマミミの妖艶なダンスなどが、賢治自身がかつて体験した「浅草オペラ」を再現したものではないかと論じた。このテキストにおける演劇的な要素は、昭和期に入ってから改作「グスコンブドリの伝記」や「グスコブドリの伝記」には踏襲されずに消えて行った。しかし、賢治が亡くなる直前の昭和八年に、「ひのきとひなげし」（初期形）が「ひのきとひなげし」（後期形）に書き換えられた際に、演劇的な要素がもう一度復活して使われている。

第二章「モーリス・メーテルリンク『青い鳥』と森鷗外「山椒大夫」、宮沢賢治「伝記群」——森で彷徨う「兄妹もの」の系譜」では、明治三五年から翻訳され、明治・大正期に日本の文壇に多大な影響を与えたモーリス・メーテルリンクの戯曲『青い鳥』の影響を扱う。メーテルリンク『青い鳥』にはチルチルとミチルの兄妹が登場しているが、この兄妹と同じような兄弟が描かれるテキストとして、安壽と厨子王の姉弟が登場する森鷗外「山椒大夫」と、賢治「ネネムの伝記」のネネムとマミミの兄妹像を比較して論じた。また、共通して『青い鳥』の受容が見られる鷗外と賢治の両テキストのプロットには様々な類似性があり、それは復讐の場面が欠如と、両テキストの幼い主人公が仕事に出される時に、寒さを凌いで身の上を嘆く場面があることを指摘することができる。鷗外「山椒大夫」の賢治ヴァージョンとして、賢治「ネネムの伝記」や「ポラーノの広場」といった「兄妹もの」を見なすことができる。

第三章「宮沢賢治「ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記」と夢野久作『ドグラ・マグラ』——E・ヘッケル、名刺、銀時計」では、「大正生命主義」期に知識人たちに多大な影響をもたらした科学者エルンスト・ヘッケルが賢治と久作のテキストに影響を与えていることを論じた。『ドグラ・マグラ』においては、「名刺」と「銀時計」が登場することによって、主人公の父親である可能性のある正木と若林の区別が曖昧になり、アイデンティティの混乱が描かれることになる。一方、賢治「ネネムの伝記」においては、主人公が森を出て町に向かう途中で、主人公が探偵だと思った人物が実は刑事であり、また、主人公の妹をさらって行く悪人が「テヂマア」という名前の男であることを踏まえ、ここでは大正期の探偵小説の流行のきっかけとなったフランス映画『ジゴマ』がパロディ

化されたものであり、このテキストにおける主人公のアイデンティティをめぐる描写には当時流行していた探偵小説の流行が背景にあることがわかる。

第四章「ドイツ伝承「ハーメルンの笛吹き男」と宮沢賢治「黄いろのトマト」——人さらいをめぐる言説」では、第一部の延長として、「ネネムの伝記」と対になっている「黄いろのトマト」を取り上げた。このテキストには、不思議な音に誘われて家から外へ向う幼い子ども達が描かれており、プロットの類似から、プレテキストとして「ハーメルンの笛吹き男」が想起される。「ハーメルンの笛吹き男」の最後に描かれる三人の子どもの悲劇と賢治「黄いろのトマト」における「かあいさう」なペムペルとネリの兄妹の悲劇は性質が異なっている。「黄いろのトマト」に描かれている子どもの悲しみは、賢治が亡くなった妹のために書いた詩編や「銀河鉄道の夜」に見られる悲しみと性質と近いものになっているのである。同じ人さらいの男のエピソードが書かれている「ネネムの伝記」と「黄いろのトマト」が相反する要素を持ったテキストになったことには、妹トシの亡くなる時期が関係しているだろう。

第五章「夏目漱石『夢十夜』と宮沢賢治「種山ヶ原」——「檜の木」、「篝火」、民俗学の受容」では、漱石『夢十夜』の「第五夜」と賢治「種山ヶ原」を比較し、両テキストに共通して「檜の木」が登場し、「馬の蹄の跡」、「谷からの墜落」といった共通のモチーフがあることを論じた。次に、漱石テキストおよび賢治テキストにおける民俗学的な要素を比較し、宮沢賢治文学は柳田や佐々木の民俗学を相対化する賢治独自の東北観が示されているのである。

第六章「上海で生成される宮沢賢治——中国雑誌『女声』の文芸欄と「注文の多い料理店」」では、賢治自身も行ったことのない戦時中の上海に注目して、賢治テキストの受容について論じた。『女声』を影であやつっていた関露が書いた第二次大東亜文学者大会のレポートが、意図的にプロパガンダ的な政治性をおさえたものであったことからわかるように、共産党の地下工作員として日本側のプロパガンダ雑誌で働いているという「立場」のズレが、この雑誌のプロパガンダ性を薄めていたのである。賢治テキストの場合は、読者によっては反植民地主義的とも読める「注文の多い料理店」が掲載作品として選ばれている。このように、『女声』というプロパガンダ雑誌に、非プロパガンダ的な政治性を見いだすことができるのである。